



矢延平六の仁池

満

濃池の功労者にかぎらず、讃岐では溜池が文字通り命をつなぐ灌漑施設であるため、それを築造した人物の中には、神として祀られた者がいる。たとえば、綾歌郡の仁池を手がけた矢延平六もその一人だ。

満濃池から自転車、琴電琴平駅に戻り、電車に乗って一〇分ほどで栗熊駅についた。同行者はかなり疲弊しているようだ。昨日は金毘羅さんの階段を含めて三五キロ。今日は自転車、既に二〇キロ弱だから無理もない。うどん屋があったので、エネルギー補給をすることにした。これでいくらか回復してくればよいのだが。

再び歩きはじめて、農道を抜けると仁池について、わりと大きな池だ。貯水量は約一五〇万立方メートル、灌漑面積は約三四七畝というから、満濃池の十分の一くらいの規模となる。池の北西隅には矢延を祀る飛渡神社がある。池の北を歩いてむかうと、道路沿いに仁池の改修碑が四つ建てられている。

飛渡神社につくと、境内にも三つ。讃岐の溜池には、必ずといっていいほどなんらかの碑が建てられているが、七つは多い。神社の表にまわると、さらに「飛渡神社碑」という碑があった。昭和五(一九三〇)年に建碑とあるが、その背面には「三百年祭

遷宮録」が刻まれている。こちらは昭和六十年のもの。古い碑の背面に別の碑文を刻むとは珍しい。遷宮録を読んでもみると、どうやらこの神社はもともと矢延の故郷富熊村にあったものを、没後三百年を記念して現在地に移したらしい。

矢延については、はっきりしたことはわかっていないが、高松藩の『松平家登仕録』にその名があり、下級藩士だったことは確認されている。矢延の事績に触れた「飛渡神社碑」は、この『松平家登仕録』と、矢延の孫の回顧録による。

碑文をかい摘むと、高松藩の生駒家が改易になり、水戸徳川家の血筋である松平頼重が高松に入封した。生駒家時代に、西嶋八兵衛が多くの溜池を築いたものの、まだ十分ではない。そこで活躍したのが、矢延平六だった。彼は四〇年にわたり、一〇〇に余るため池の築造、改修を手がけ、その中でも仁池は最も著しいものだった。しかし、ここで理不尽なことが起こる。仁池を必要以上に大きく造り、藩や百姓に浪費させたと讒言した者がおり、牢人の憂き目にあう。ところが、有能な技術者だったためか再登用され、七四歳で病を得るまで、再び池溝の築造に励み、貞享二(一六八五)年に七六歳で没した。

ところで、この讒言で禄を追われる話だが、疑問

が残る。『松平家登仕録』によると、寛文八(一六六八)年に加増されるとあり、この時すでに五九歳。その後、年月日は不明だが経費節減の折に「御暇申上願之通」とあり、藩の財政も逼迫している。高松を理由に自ら退いたように思える。さらに延宝七(一六七九)年、碑文の通りに再雇用されるが、なんと七〇歳だった。老人の力を借りなければ成就しない難工事でもあったのだろうか。(つづく)



飛渡神社

[交通] 琴平電鉄琴平線 栗熊駅より徒歩約15分

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi